

---

# 魔術師!!REINE

林川 理都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔術師！！REINE

### 【Nコード】

N5223BA

### 【作者名】

林川 理都

### 【あらすじ】

魔術師になりたいと願う少女。 租田玲音。

その玲音が魔術を完璧に習得するまでの物語です！

## 登場人物紹介！

[illegible]

メインキャラ（主人公）

租田 そだ  
玲音 れいね  
13歳

魔術練習中。

魔術師の兄、そだれいむ租田玲夢に魔術を教えてもらっているが全く上達しない。

家族からある意味すごいとよく言われている。

この小説の主人公。

魔術歴：1年

租田 そだ  
玲夢 れいむ  
17歳

魔術師の一人。

4歳年下の妹、そだれいね租田玲音に魔術を教えて欲しいと言われ今、教えている途中だが、妹の覚えの悪さに兄も悪戦苦闘している。

魔術歴：4年

租田 そだ  
幸秋 ゆきあき  
65歳

魔術師の一人。

玲夢、玲音の祖父。租田家で一番最初に魔術を教えた人。

現在、隣の家で来子、栄と住んでいる。

魔術歴：48年

故 永藤 えとう  
初栄 はつえ  
(31歳)

（魔術師の一人。

租田幸秋に魔術を教えた。魔術を一番最初に作り出した人。

魔術を世界中に広めようとしたが、しかし誰にも信じてもらえず、唯一、租田幸秋（れいむ、玲音の祖父）に信じてもらい、魔術を教えた。

租田幸秋が28歳の時（当時・魔術歴：11年）、永藤初栄が交通事故にあい、31歳（当時・魔術歴：13年）でこの世を去った。）

現 永藤 初栄 30歳

魔術師の一人。

租田幸秋が35歳の時（当時・魔術歴：18年）、永藤初栄をよみがえらせた。

初栄もその技術に驚きながら、幸秋にお礼を言った。

現在同姓同名の人が居ると怪しまれるので「租田 泉美」と言う偽名を使って生活している。ちなみに、間がらとしては、租田幸秋、來子が養子として一緒に暮らしている。という事になっている。

現在、租田家の隣の家に租田幸秋、來子と一緒に住んでいる。

### サブキャラ（登場人物）

租田 和美 41歳

れいむ、玲音の母親。魔術師の一人。

この家に来て魔術を使っているのを見て驚いた。

魔術歴：17年

租田 菊秋 41歳

れいむ、玲音の父親。魔術師の一人。

魔術は子供の頃から教えてもらっていた。

魔術歴：31年

租田 來子 67歳

れいむ、玲音の祖母。魔術師の一人。

和美と同じくこの家に来た当初は魔術を使っているのをみて驚いた。



登場人物紹介！（後書き）

第1話は後程

**【第1話】浮遊術練習！？（前書き）**

早速、第1話です！

## 【第1話】浮遊術練習！？

【第1話】浮遊術練習中？！

「まず、昨日の復習！」

れいねに、兄のれいむが気合いを入れるように言った。

「れいね、部活は？」

母のかずみがれいねとれいむの話しているのに、お構いなくれいねに尋ねた。

「今日ない！」と一言でれいねがはなしをすませた。

「では、気を取り直して昨日の復習！」とれいむがまるつきり同じセリフで言った。

「はい！兄ちゃん！」

やる気満々にれいねが大声でそう言った。

「んじゃ、まずその紙！浮かせてみる。」

れいむが玲音に指示を出した。

れいねが紙を手に持ち「はい！」と言った。  
その自信は何処からわいてくるのだろうか。

れいむがバシッ！とれいねの後頭部に平手打ちをくらわせた。

「お前はやる気あるのか……！」れいむが怒り半分でそう言った。

「えへー」頭を痛そうに抱えながら、れいむを挑発するかのよう



言った。

「えへーじゃねえよ」れいむが本気で怒りだした。

「はい！すみませんでした！」れいねがすごいオーラにおされながら頭をペコペコ下げて誤った。

「気を取り直してもう一回、んじゃあ、さっきと同じように紙を浮かせてみな。」

まだ、少し怒りながらもれいむがれいねにさっきと同じように指示を出した。

「あいさー！　ん…」

れいねが本気なのか本気じゃないのかは定かではないが、頑張っている、ようにも見えなくもない。

フワッ！

「あつ、浮いたういた！　浮いたよ兄ちゃん！」

れいねがすごい興奮してれいむにそう言ってきた。

「ばーか、俺が浮かせたんだよ！」れいむがさっき馬鹿にしたお返しと言っかのように、れいねを馬鹿にした。

れいねがすかさず言い訳に入る。「嘘じゃないもん！　本当に私が浮かせたんだもん！」

「それはどうでしょうねー」

れいむが、ますます挑発させるような言い方をした  
そこで、れいねがキレた。

「兄ちゃんの、馬鹿！　アホ、カス！！！」

れいむが単純な挑発にのってしまった。

バツ！！！！

「何だこれ？　体が浮いていく、卑怯だぞ！」

そう言いながら、れいねの体がどんどん宙に浮いていく。

「お前が魔術つかえねーのがいけねーんだろ！？　半分、怒ったようにれいむがいった。

「何、騒いでるの？！　ご飯にするわよ！　早く降りてきなさい。」  
階段の下から、母のかずみが呼んだ。

「はい。」

返事を、れいむがしながられいねを床の上に落とした。

「いで！痛いじゃないか！！」れいねがドンツとにぶい音をたてて下に落ちた。

「お前が、魔術使えないからだろ？」

れいむが呆れながらそう言った。

「れいねがまともに、魔術が使えるようになったら勝負してやってもいいぜ」

れいむが上から目線でそう言った。

「この・・・」れいねが、すごい頭に来ていたのか顔を真っ赤にしている。

その時、フワツつとれいむの体が浮かんだ。

「えっ！？」れいねがれいむが浮いているのを見て驚いた。

『えっ、もしかして私が兄ちゃん浮かしてるの！？』

「おつ、おい！ れいね何した！？」「れいむが慌てて、れいねに聞いた。

「知らないよ！ って言うかどうかすればこの術解けるの！？」「れいねが大慌てでそう聞く。

れいむが慌てて術の解き方をれいねに教える。「俺に集中するな！ そうすれば術は解ける！」

それを聞いたれいねは、れいむから背いたが依然、術は解けない。

「こいつの術はどうなってるんだよ！」「れいむが声を荒げながらそう言った。

れいねが「えっ、どうすればいいの！？」「とれいむに聞くが「しらねーよ！ お前の術だろ！ 自分で解け！！！」と言いながられいむが部屋の中をさまよっている。

「ええ？！」「れいねがそう言いながら、ふと前を向くと子猫が！

「猫」 と言いながられいねが猫を触り出したと同時にれいむにかかっていた術も解けた。

「あー、びっくりした。どうなってるんだよ。マジであいつの術は」といいながら猫を触っているれいねの服をもってリビングに行こうとする。「あ・猫」と言いながられいねが引きずられていく。

「へえー、れいね浮遊術使えるようになったんだー」母のかずみが関心したかのように言う。

「すごいでしょ！」「れいねが威張ってそう言った。

「まあ、俺を浮かせたあげく術解けなくなってる、しまいには猫さわり始めたからな。」「れいむがおかずをほおばりながらそう言った。

「今、解けてるじゃん！ 術。」れいねがれいむの言い間違えたところをずばり言った。  
「うるせーなー」とれいむが言いながらまたおかずばかり食べている。

「れいむ！ おかずばつか食べてないでちゃんとご飯も食べてよ！」かずみが不機嫌そう言った。  
「食べてる！！！」

「ごちそうさま。」  
かずみがれいむの茶わんを見て、ご飯が残っているのに築いた。「あつ、れいむ、ご飯残ってる、ちゃんと食べなさい」

「無理。もう食えない。」れいむがイラついたようにいいながら、リビングから出て行こうとする。  
「待ちなさい！」とかずみが言うと同時にれいむの耳が引っ張られるように、こつちへ戻ってくる。

「わかった、わかったから！」れいむが涙目になりながらそう言う。  
そして、一瞬でご飯を食べきった。

「最初からちゃんと食べきればいいのに……」かずみが呆れたように言う。

P M 2 : 3 0

「何で、さつき俺を浮かせられたのにこんな紙屑は浮かせられないんだよ……」れいむが呆れながら、れいねにそう問いかけた。  
れいねが紙屑を浮かせられないのにイライラしているのか、そのイ

ライラをぶつけるように「知らないし！」と曖昧な返事をしながら、  
イライラを兄のれいむにぶつけた。

ピンポン…

「はい」母のかずみが玄関に行き「あつ、おじいちゃん入って」と言うとその声に反応して、れいむとれいねが一目散にリビングに向かう。せまい階段を我先にとれいむとれいねが押し合いをしながら下りてきた。

先にれいねが大きい声で「おじいちゃん！」と呼んだ。

「まあ、階段は静かに下りてきなつて何回言えばわかるの!？」とかずみが不機嫌そうに言う。昼からかずみはずっとこの調子だ。

「まあまあ」とそこに祖父の幸秋が仲裁に入る。れいむは呆れ顔で  
かずみとれいねを見ている。

終始沈黙が続き、そこに幸秋が「あつ、そうそうかずみさんこれ。」と差し入れの畑でとれた野菜の詰め合わせをかずみに渡した。野菜の詰め合わせと言っても、なす、きゅうりなどの野菜がスーパールの袋に入ってるだけ。

「あれ、何かおじいちゃん、野菜だけにしては重たくない？」かずみは手渡された袋をもって異様な重さに気付いた。

「野菜、出してごらん」幸秋が微笑みながらそう言った。

「ん？」かずみが緑と黒のしま模様の物を発見した。「スイカだ!」とれいむとれいねが声をそろえて言った。そこには小玉スイカが3個程入っていた。

かずみが「有難うございますう」といい一礼し感謝の意を表した。

「いえいえ、それにしても今日は暑いねー」と幸秋がハンカチで汗

を拭いながらそう言った。

すかさず、かずみが「よかったら、涼んで行きます?」と親切に言う。

「ああ、助かるよー、俺の家クーラーないからー」と言いながら、その言葉を待ってましたーと言わんばかりに、幸秋が嬉しそうに言った。

その間、れいねが「スイカ、食べよ! ねえ、食べようよ!」とずつと横でうるさい程言っていた。

かずみが「わかった、わかったから、和室行つてな」とかずみが強引にれいねを和室に入れた。その後ろをついて行くようにれいむが入っていく。

「じゃあ、俺も・・」と幸秋がれいむの後ろをついて行くように入っていく。

「あつ、どうぞ」ともう幸秋が和室に入ってからかずみがそう言った。

そして、かずみはキッチンの方で幸秋に出すお茶とお茶菓子を用意して持って行き、幸秋の方へ差し出した。

「お母さん、スイカも!」とかずみにれいねが言う。

「待ってなさい、今持ってくるから」とかずみが半分怒りをあらわにして言う。

そして、スイカを持ってくるとかずみは早速、幸秋と話始める。

かずみが「おじいちゃん、おばあちゃんといずみさんは?」といきなり幸秋に聞き始めた。

「おばあちゃん来子は、仲間と旅行。いずみは夕飯の買い出し。」とすらすら言いながら、お茶菓子の煎餅をぼりぼり食べながら答えた。

「おじいちゃんも何処か出掛ければいいのに」とかずみが言うと同時に「うまいー!!!」とスイカを食べてるれいねが大声で言った。その瞬間れいねの頭を叩きながら「うるさい!」とかずみが切れた。それでも、めげないれいねは、今度はおじいちゃんに「ねえねえ、じいちゃん! 今日ね私ね! 浮遊術使えるようになったの!」と嬉しそうにその事を幸秋に知らせた。

「浮遊術つつても、俺にム力ついて俺を浮かせたただけだな...」れいむがれいねの浮遊術は偶然使えたただけだ。と言うようにれいねに言葉を返した。

「でも、浮遊術を使えたのは、すごいよ!」と幸秋が関心しながら言う。

「じいちゃん、聞いてよ! れいね紙屑も浮かせられないのに俺を浮かしたんだよ? 何か基準がおかしくない?」と少しれいねを馬鹿にするように言った。

「うーん、、かずみさん!」幸秋が何か思いついたのか、かずみを呼んだ。

「あつ! はいつ。」かずみが話の輪に入れないでポーツとお茶を飲んでいて急に呼ばれたからか、これがいつもと違った。

「何か重くて大きい物ありますか?」と幸秋がかずみに聞いた。

「大きくて、、重い物・・・あつ!」かずみがピンと来たのか廊下にて自分の部屋に向かった。

ドサッ!

「何・・・これ・・・」れいねが呆れたようにそう言った。

「あー、これ、ずっと前の雑誌そのまんまとっておいて、こうなった(笑)。」

(いやいや、こうなったって・・・)一同が沈黙した...

「取りあえず、これを持ち上げてみて」幸秋がその場の空気を直すようにそう言った。

「おじいちゃん、それは無理だよ」とれいむがあきらめたように言った途端にフワツと

雑誌の束が浮いた。

「・・・えええ!？」れいむがすごい驚いている。

「わあ、浮いたういた!」れいねが喜びながらそう言った。

「れいねの術の基準はどうなってんだ」とれいむが驚いたように言った。

「こんな魔術の基準の人は初めてみた。」幸秋が珍しがるように言った。

「(だろうな...)」とれいむが心の中で呟いた。

その間、ずっと横で浮いた!浮いたぞ!とれいねが興奮気味に言っていた。

P M 5 : 3 0

ピンポン

「はい。」夕飯のしたくをいつの間にか始めていた、かずみがハンカチで手を拭きながら玄関に向った。「あら、いずみさん。」とかずみが言った時いずみの表情で何を言うか察したのか、「おじいちゃんなら、中にいますよ。」と手を拭いていたハンカチをポケットにしまいながらかずみが言った。

「すみません。こんな夕方まで...」といずみが申し訳なさそうに言いながら頭を下げた。

「いえいえ、子供達の相手してくれているので、全然平気ですよ」とかずみが微笑みながら言った。



「どうぞ。」かずみが和室に案内しそう言った。

「おじいちゃん、何で勝手にお邪魔してるの!?」いずみが何回言ったら分かるの。と言うように言った。

「ああ、別にいいよ、ね? かずみさん」と幸秋がかずみに助けを求める。

「別にいいよねじゃないわよ! もう5・30よ!」とへ理屈ばかり言う、幸秋に激怒した。

「ああ、もうそんな時間かあ、悪い悪い。」と適当にいずみに謝ると立ち上がり「じゃあ、かずみさん、ありがとうございます」とかずみに一礼した。

「バイバイ。じいちゃん!」とれいねが言うのに答えるように幸秋が手を軽くふりながら、玄関の方へ向かう。

「じゃあ、また今度!」と幸秋がかずみに言う。

「すみませんでした、長々と」といずみが深々と頭を下げ家をあとにした。

P M 7 : 0 0

「ただいまー」れいむとれいねの父親の菊秋が家に帰宅した。

しかし食事中なのか誰も玄関に向かえに来ない。

「オイ、玄関に向かえくらいこいよ!」菊秋がかずみにそう言った。しかし、かずみはその話に一切触れず菊秋の方を向いて「ご飯、冷めるよ」と言っただけで黙々とご飯を食べ始めた。

「わかってっから! てかこっちの言っただけは無視かよ!」菊秋が無視された事に怒りながらも、いつも夕食の時に座っている自分のとくとう席に座り夕食を食べ始めた。

その時…幸秋宅では…

「おじいちゃん、何で勝手に人の家行っちゃうの？子供ですか？」  
居間でいずみが幸秋を怒鳴っている。

「あー、まあまあ」幸秋がテレビを見ながらいずみを抑えようとす  
る。

「まあまあ、じゃないわよ！」いずみがすごい汗をたらしながら、  
幸秋に怒鳴り散らした。

「悪い、悪かったから。怒鳴り散らすな。」と適当に幸秋がそう言  
う。

「…、はあ、まあいいや。明日…來子さん帰ってくるし」いずみが  
冷静になつてそう言った。

「えっ、明日帰ってくるの!？」幸秋が顔色を変えてそう言った。

「そうよ。」いずみが急に声色を変えてそう言った。

「頼む、この通りだ。來子には言わないでくれ！」さっきまで、あ  
んなのんきにくつろいでいた幸秋が、土下座をして手を合わせてい  
ずみに頼む。

いずみも相当頭に来ていたのだろうか「嫌です」と即答した。

「勘弁してくれ…」こんなやり取りが続いたあげく、夜が明けて…

A M 6 : 0 0

幸秋がふらふらしながら外に出て菊秋の家に向かう。

ピンポン…

「誰？こんな朝早く…」とまだ寝ていた、かずみがそう言いながら

玄関に向かう。

「はい……」と言っても返事がない。「どちら様ですか？」とかずみが言った時、ゆっくりドアが開く。

「か……ず……みさ……」幸秋が力なくかずみを呼んだ。

「えっ、おじいちゃん!?」とかずみが言いながら、慌てて菊秋のところへ向かう。

「あなた、起きて!」とかずみが無理矢理菊秋を起こす。

「何だよ……」と菊秋が寝ぼけながら言う。

「おじいちゃんが、玄関で倒れた!」かずみが菊秋に慌てながら言う。

「はあ?!」と菊秋が同様に言う。

「親父どうした?」と言うと「來子が帰ってくる」と幸秋がすごい恐怖に怯えるようにそう言った。

「……」無言のまま菊秋が去って行った。

**【第1話】浮遊術練習！？（後書き）**

どうでしたか？感想もらえると嬉しいです！  
好評でしたら続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5223ba/>

---

魔術師!!REINE

2012年1月14日16時51分発行